

(資料1・表面)新たな「京都市動物園構想」全体構成の考え方イメージ

京都市動物園の役割

1: 種の保存・環境保全

2: 研究

3: 教育・環境教育

4: 娯楽・観光

**京都市動物園
理念
(将来にわたって
目指す方向性)**

- ・私たちは、絶滅の恐れのある動物種の繁殖に取組み、希少種の命をつなぎ、種の保全に寄与します。
- ・私たちは、動物の福祉に配慮し、命を輝かせる飼育・展示を行います。
- ・私たちは、種の保存や動物福祉、比較認知科学などの研究を推進し、生物多様性の保全に寄与します。
- ・私たちは、種の保存の取組や研究の成果を生かし、幅広い年齢層を対象に環境教育を実践し、楽しい学びの場を提供します。
- ・私たちは、文化を基軸として、施策を展開するとともに、人と動物に係る様々な文化を発信します。

京都市動物園が取り組む課題

課題① 種の保存・環境保全

～「生命をつなぎ、生命が輝く動物園」となるために～

- ・絶滅危惧種（ゴリラ、ゾウ、グレビーシマウマ、イチモンジタナゴ、ツシマヤマネコなど）の域外保全から域内保全への展開を推進する必要がある。
- ・動物福祉の取組（環境エンリッチメントなど）の充実が必要である。
- ・国際的な枠組みの中で中長期的な動物種の飼育展示計画を検討し、実現に向けた取組が必要である（Species360への加入など）

課題② 研究

～「研究する動物園」として発展するために～

- ・霊長類の知性や動物福祉に関する研究の更なる充実が必要である。
- ・生き物・学び・研究センターの活動内容と研究成果を発信し、教育と集客へ生かすことが必要である。

課題③ 教育・環境教育

～「学べる動物園」となるために～

- ・すべての世代に対応した生涯学習施設としての機能・コンテンツの充実が必要である。
- ・身近な環境から地球レベルの環境問題に向き合う機会となる環境教育施設としての機能・コンテンツの充実が必要である。

課題④ 娯楽・観光

～「多くの人が集う動物園」となるために～

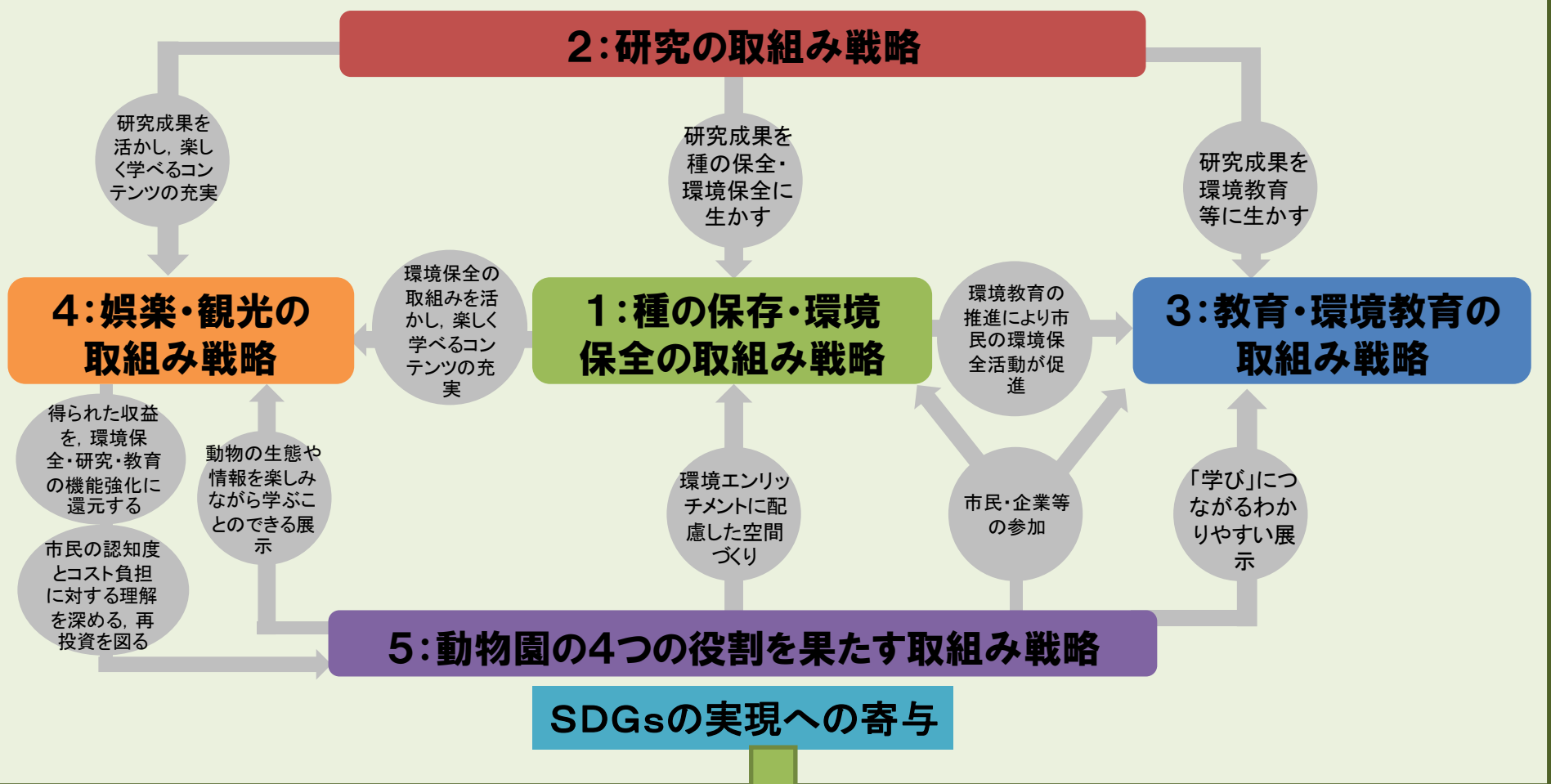
- ・国際観光都市京都に立地する動物園として、観光客の多様化、インバウンドに対応した施設、展示の充実・配慮が必要である

課題⑤ 動物園の4つの役割を果たす

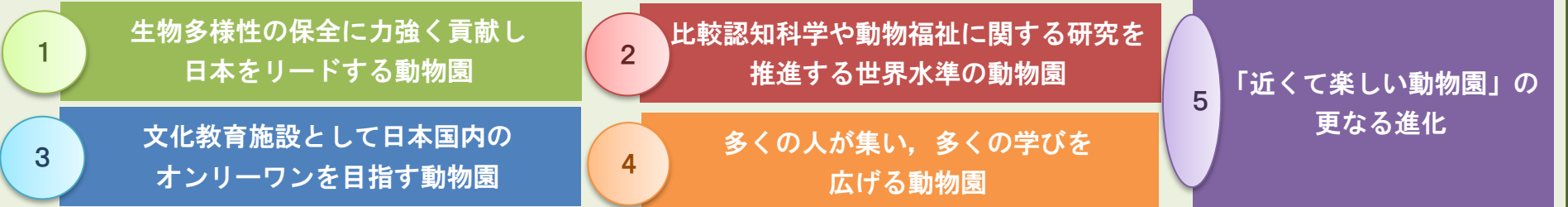
～「近くて楽しい動物園」として進化するために～

- ・現代的な展示手法や動物福祉の考えを積極的に取り入れた飼育、展示施設の充実を図る必要がある。
- ・中長期的な施設整備の計画策定や施設の長寿命化（計画修繕）の実施が必要である。
- ・市民等との協働による運営等を推進することが必要である。

**新たな「京都市動物園構想」の推進戦略（SDGsの実現に寄与する今後10年間の取組みの方向性）
～動物園の各役割の関連性から取組む方向性を考える～**



5つの柱（=5つの目標）と27の施策



(資料1・裏面)新たな「京都市動物園構想」の推進戦略(SDGsの実現に寄与する今後10年間の取組の方向性)

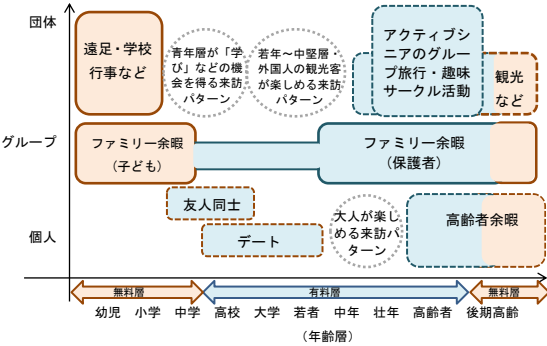
4: 娯楽・観光の取組み戦略

より多くの人々が訪れ、楽しんでもらうことにより、動物園の役割を達成すると共に、公共施設としての経営基盤を確立することが必要

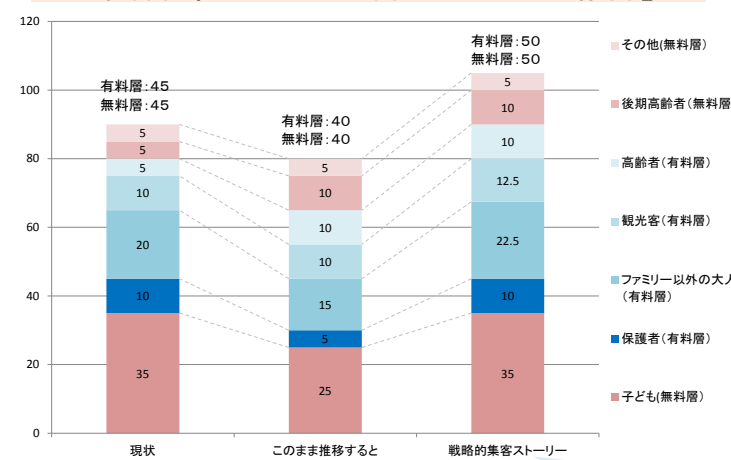
- ・魅力低下、コンテンツの新鮮度の低下による集客力ダウンが続かないように、定期的な設備投資・展示手法の更新
- ・研究成果などの専門性を活かしたエンターテインメント性の高いコンテンツの作成
- ・戦略的な誘客ターゲットに対する魅力向上など

集客に関する考え方(例)

入園者の傾向分析・動向分析により戦略的に誘客すべきターゲットを想定した上で、それらへの対策を取ることで、誘客目標の設定を検討する。



「集客目標(例): 年間100万人の維持」



- 少子化による子ども・保護者の減少
- 経年化により大人の減少
- 観光客は維持
- 高齢化により高齢者は増加
- 教育施設としての機能向上により子ども・保護者は維持
- コンテンツ魅力向上により大人・観光客は増加
- 高齢化により高齢者は増加。特にアクティブシニアが増加。

得られた収益を、環境保全・研究・教育の機能強化に還元する

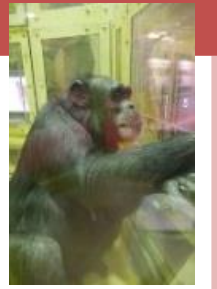
市民の認知度とコスト負担に対する理解を深める、再投資を図る

2: 研究の取組み戦略

動物の生態や比較認知科学等に関する研究を行い、その成果を種の保存、環境保全及び市民の環境教育の取組に還元することが必要

- ・京都大学や山階鳥類研究所との連携による野生動物研究の推進。
- ・研究成果を市民にわかりやすく伝える など

- これまでの研究成果の例
 - ・DNAのメチル化によるチンパンジーの年齢推定
 - ・体毛中コルチゾールによる動物福祉評価
 - ・飼育下シマウマ個体群の分子遺伝学的解析
- 現在までに実施した教育普及事業
 - ・研究者によるガイドイベント
 - ・京都精華大学との環境教育連携。
 - ・京都大学との連携事業「野生動物学のすすめ」



研究成果を種の保存・環境保全に生かす

研究成果を環境教育等に生かす

1: 種の保存・環境保全の取組み戦略

種の保全や、環境保全に向けた活動や啓発の拠点としての機能強化が必要

- ・持続可能性・繁殖拠点としての機能充実
- ・域外保全種の飼育による環境保全の取組を進め、環境問題に取り組む拠点として認知度の向上 など

例: グレビーシマウマの繁殖場所としての機能強化など



例: ヤマネコ米の市内利用の促進による生息環境の保全など



環境エンリッチメントに配慮した空間づくり

市民・企業等との参加

「学び」につながるわかりやすい展示

3: 教育・環境教育の取組み戦略

市民に対する生物多様性の環境教育拠点としての機能強化が必要

- ・教育機関として子どもにわかりやすく動物の生態や環境問題を伝えるコンテンツ等の作成 など

例: 動物園の動物を取り巻く様々なストーリーの映像コンテンツ化など

(事例: 動物園のあるまちプロジェクト(十勝毎日新聞社))



環境教育の推進により市民の環境保全活動が促進

5: 動物園の4つの役割を果たす取組み戦略

京都市動物園が持つ役割を効果的に実行するために、より魅力的な空間とするための施設整備や市民等との協働による運営等を推進することが必要